勅撰和歌集における「霧」考

松村紀子

はじめに

詩歌は、多くの文学のジャンルの中で、上代より現代まで、その盛衰は激しかったであろうが、長い歴史を通して生きつづけている。それらを築いてきた人々の態度や心情を知ることによって、これからの詩歌をより深く、正しく理解する手だてにしたいと考えた。だが、古の人の心を現代の我々が知ることは容易ではない。

しかし、歌に採りあげられた題材がいかに扱われているかを調べることによって、多少なりとも明らかになると思う。

さて、「霧」はどのように扱われているであろうか。長い和歌の歴史において、後の歌集に多くの影響を与えた勅撰和歌集について検討してゆくことにする。

「霧」は、風物に興趣を添えるものとして、古来詩歌の題材となったものが少くないといわれている。その浪漫的情趣が、人の心の迷いや憂いにたとえられたりして、ひとつの哀愁にも似た淡い感情および、翳をも持って、我々の心にうったえてくるものである。

検討するにあたっては、「国歌大観」をテキストとして勅撰二十一代和歌集に詠み込まれた「霧」の歌を拾い挙げいろいろな角度から項目別に分類し、各々の用例数表を統計的に考察する方法を用いた。

なお、項目によっては必要上から万葉集もあわせて考察した。これは、塙書房刊「万葉集」による。

一、霧の時代変遷

勅撰和歌集における「霧」と時勢との関係がどのように現われているであろうか。なお、春日ミナ子氏の本学卒業論文『万葉集・八代和歌集に於ける「霧」考』と比較し考えてゆくことにする。

勅撰和歌集における総歌数三三七一一首中「霧」が詠み込まれているのは、三九七首で、その比率は全体の一・一八％である。これを時代別にみてゆくと第一表のようになる。

〔第一表〕

時代区分	含まれる歌集	①総歌数	②勅撰集における「霧」の詠歌	①に対する②の比率
奈良時代	万葉集	四五一六	六三	一・四〇%
平安前期	古今集・後撰集・拾遺集	三八八八	四四	一・一三%
平安後期	後拾遺・金葉・詞花・千載・新古今	五六一一	四四	〇・七八%
鎌倉前期	新勅撰・続後撰・続古今・続拾遺・新後撰	七七三六	八三	一・〇七%
鎌倉後期	玉葉・続千載・続後拾遺・風雅	八四九四	一四〇	一・六五%
南北朝	新千載集・新拾遺集・新後拾遺集	五八三八	五五	〇・九四%
室町時代	新続古今集	二一四四	三一	一・四五%

第一表から、詠歌数とその割合をみてみると、「霧」は各時代ごとに異なった傾向をみることはできない。

ここで、春日ミナ子氏の結論と比較してみよう。春日氏は、「各集に於ける霧の用例数について」の中で、『霧は万葉集（奈良時代）に一番多く詠まれている。つづいて、古今集・後撰集つまり奈良時代と平安前期が多い。それはその当時の人々や撰者にとって、霧は、関心深いものであったろうと思われる。又、後拾遺集以後減少しているが、人々の霧に対する関心がうすれた為か、或は、歌の題材が多くなってきた為かとも考えられる。』と、述べてある。

第一表によると、確かに、奈良時代に一・四〇%であった霧の詠歌率は、八代集の終りをつげる平安後期には〇・七八%とさがっている。しかし、鎌倉前期には一・〇七%と上昇し、更に、鎌倉後期には全時代の一番高率である一・六五%となっている。つまり、平安後期の現象は一時的なものであって、むしろ時代が下って一段と詠歌率が増しているのだから、春日氏の結論は早急すぎたと思われる。霧は、題材として失われることなく、二十一代集の中に生きつづけているのである。

次に、霧の名称の範囲をみてゆくことにする。

〔第二表〕

霧の名称／時代区分	朝霧	夕霧	秋霧	山霧	川霧	薄霧	夜霧	雨霧	せぎり	その他
奈良時代	五七・一	四・三	／	八・一	三・六	／	十四・三	三・六	／	四四・四
平安前期	十四・七	／	六一・八	／	二三・五	／	／	／	／	七七・二
平安後期	八・三	二五・〇	三六・七	／	十六・七	十三・三	／	／	／	五四・五
鎌倉前期	十・二	三七・〇	三〇・六	／	二〇・四	／	／	／	一・八	五九・〇
鎌倉後期	三二・〇	十六・九	三〇・五	／	十一・九	十八・七	／	／	／	四二・一
南北期	十一・八	十七・六	三五・三	／	三五・三	／	／	／	／	三〇・四
室町時代	十四・三	二八・六	三五・七	／	七・一	十四・三	／	／	／	四六・七

（単位は％）

第二表は、歌に詠み込まれた霧の範囲を名称からみたもので、ひとつの素材の詠み方は、万葉集以下三種から六種とその範囲はせまいものである。

奈良時代は万葉集をもってした。霧の名称の範囲は、朝霧、夕霧、夜霧、山霧、川霧、雨霧と、全時代を通じて一番広く詠んである。万葉集は、作者の作歌態度が心にもない美飾や誇張を施さぬ質実の点からみても、作品を味わって受ける感じの点からみても、「真実」という点で後世の凡ての撰集にまさっている。故に、素材を表現する方法が現実的に写実的にはっきりといい現わしているために、この当時の題材としての発展が、写実にとまっているとしても当然なことといわねばなるまい。中に、枕詞、序詞として使われているものがあるとしても、根本態度は変らないと考える。

平安時代になると、万葉の現実的写実的なものは薄れ、情趣的・優美的なものが濃くなったといわれる。霧の名称の範囲は、前期が朝霧、秋霧、川霧と全時代を通じて一番せまいものである。ここで、「秋霧」という表現が他のどの時代より多く詠まれているのは、観念的な表現を好んだ時代の反映であろう。後期には、薄霧という写実的名称がでてくるが依然として「秋霧」という名称が前期につづいて多く詠まれている。この期は、「三夕の歌」等ともてはやされた夕が、前期にはみられない「夕霧」として多く詠まれている。

鎌倉時代、新古今集以後の和歌に変化は起らず、むしろ和歌は衰退の途をたどった。しかし、「霧」の詠歌数は、これ迄減少してきたのにひきかえ、上昇してきて、鎌倉後期には全時代を通じての最高を示している。

これは、新古今集以後、マンネリ化した勅撰集に新風を築こうとした玉葉・風雅の歌人達の努力の結果が、伝統的な花鳥風月を越えて多方面の題材を扱う形として現われたと考える。

以上の考察から、和歌に詠み込まれた「霧」の変遷にはその歌が詠まれた時勢の影響がみられよう。

二、霧と風雅和歌集

風雅集における「霧」の詠歌率は二・三二％と、以下の玉葉集一・八八％、続拾遺集の一・六四％、万葉集の一・四〇％をしのぎ、最底の千載集の〇・五四％を大きく引離して、万葉・二十一代集中で一番の高率を占めている。

本集は、花園院が二条家の形式的概念的なものと比較し精緻なる写実と清新なる感覚とを取り込れた独特の歌風をもって編まれ、他の勅撰集の中で異色を放つものである。この集の歌人は異色があり、女流歌人の優れていること、初めて勅撰集に入った歌人約八十人。本集のみ勅撰作者の名を伝えるものがほぼ同数で、撰歌の標準乃至態度が、先人の遺作に模範を求めたりしない時勢の反映であろう。

本集の「霧」の詠歌数五十の範囲をまとめてみると第三表のようになる。

〔第三表〕

霧の名称	秋霧	夕霧	朝霧	河霧	薄霧
二十一代勅撰集の全詠歌数	75	46	34	38	16
風雅集の全詠歌数	4	3	7	2	10
全詠歌数に対する風雅集の詠歌数の割合	5.3％	6.5％	20.6％	5.3％	62.5％

第三表によると、勅撰集中七十五例の「秋霧」は、風雅集中では四例にすぎないのは、「霧」は秋のものと固定化しつつあるところから、その名称も多いのに、風雅集では少なく、眼前の事実を詠んだものである「薄霧」が一番多く詠まれているのは、写実的態度の現われであろう。

風雅集の霧の詠歌作者を『和歌大辞典』により分類すると第四表のようになる。

〔第四表〕

革新派	十八名	風雅集の全詠歌①	三八九	風雅集の霧の詠歌②	二三	①に対する②の割合	五・九％
保守派	九名	風雅集の全詠歌①	八四	風雅集の霧の詠歌②	九	①に対する②の割合	十・七％

風雅集が革新派の人々により編まれたものであるところから、多くの作者がいるのは当然のことである。

保守派は七名であるが、霧の風雅集における詠歌率は、革新派のそれの二倍近くある。これは、保守派であっても「花鳥風月」という伝統的題材にのみとらわれず、広範囲に題材を求めたことが、風雅集の撰歌態度乃至標準に達し

て採られたと思われる。

風雅集に霧が多く詠まれている傾向は、万葉集において題材・用語の範囲が広いことに相通じるものがある。『古典読解辞典』（東京堂版）によると、『万葉集の題材は、後世の和歌のやうに情趣的対象としてのいわゆる花鳥風月に限定されることなく、現実生活の諸相が清新・豊富な用語によって自由に歌われている。』とある。万葉集における「霧」と、風雅集のそれとをみてみると、「秋霧」は万葉にはないが、「朝霧」が十六例あるのに対して「夕霧」は四例にすぎない、等の範囲に類似した点がみられるところから、風雅集は、万葉集の歌風のいき方に同調しているのではないかと考えられよう。

三、霧の詠まれた時期

霧の季節的関係をみるために、勅撰集中の霧の詠歌三九七首を部立別にまとめて第五表にした。

第五表によると、霧は秋に一番多く詠まれているが、春、夏、冬の部の歌もある。それらの歌をみてゆくのに、気象学の方面から霧について述べる。『霧は雲と同じように、大気中の水蒸気が凝結核を中心にして凝結した細かい水滴の集りで、本質的には雲と変りない。上空に出来たものが雲で、地上付近に出来たものを霧と呼んでいるに過ぎない。春や秋の明け方などにみられる霧は、たいてい雨のないよく晴れた静かな夜にできる。夏季、川や湖などの近くでもよく霧が起るが、これは昼間の日射により、比較的高い温度になった水面から蒸発した水蒸気がその上にある冷たい空気の中にはいって霧ができる。』（「世界大百科事典8」平凡社版）以上のように、霧は条件が揃えば、春も夏も起り得るということができる。

〔第五表〕

歌集／部立	春	夏	秋	冬	歌集／部立	春	夏	秋	冬
古今集	/	/	6	/	続古今集	/	/	13	/
後撰集	/	/	10	/	続拾遺集	/	/	22	/
拾遺集	/	/	10	1	新後撰集	/	/	11	/
後拾遺集	/	/	4	2	玉葉集	/	/	37	/
金葉集	/	/	3	1	続千載集	/	/	11	/
詞花集	/	/	1	/	続後拾遺集	/	/	10	/
千載集	/	/	5	1	風雅集	2	/	40	/
新古今集	/	/	10	/	新千載集	/	/	11	/
新勅撰集	/	/	11	/	新拾遺集	1	1	13	1
続後撰集	/	/	9	/	新後拾遺集	/	/	14	/
					新続古今集	/	/	22	/

冬歌の霧は六首ある。その内五首は、川に於ての霧を詠んだものである。川霧は『冬は水面が暖かい為に、湯気のような霧が水面から立ち上るのがしばしばみられる。』と

あるから、普通の霧と異なって、冬にも詠まれたと思われる。残る一首は、時雨が詠み込まれている。時雨は『秋から冬にかけて、降ったり晴れたりする小雨の名。』（『明解古語辞典』金田一京助監修）とあるので、この例は、山地での霧を詠んだものであるが、冬に霧が浮き立つ条件はできると考えられる。

以上のことから、霧は条件が一番揃う秋以外、春、夏、冬にも発生するのである。

それでは、秋に「霧」が、或は、秋霧が多く詠まれているのは何故か。秋が物寂しい気分の季節であるという情調性が霧のもつそれと類似しているからと考えられる。そして、修辞上の技巧も又、一因であろう。

古今集　巻第十二　恋歌二

題志らず　　凡河内躬恒

兵〇 秋霧のはるるときなき心にはたちゐの空も思ほえなくに

この秋の何か寂しい恋の姿に端的に表われている。心のまどいを「秋霧」に、「立居」は自分の起居と、霧の立つにかけ、従って「空」という言葉を使ったのであろう。

霧は、たちこめて視界をさえぎるものであることから、隠された部分に想いをめぐらすことや、心中の憂いや迷いをたとえる場合にも用いられることとなる。それが、秋の物思いにひたる哀愁の季節であるところと一致して、秋により多く題材として用いられたと考えられる。

さて、一日のうちではどの時刻の「霧」に関心がもたれたであろうか。

〔第六表〕

時刻名	暁	朝	夕	夜	その他
時刻をはっきりと詠んでいる歌数	22	80	73	20	202
霧の総歌数に対する時刻名の割合	5.5%	20.2%	18.4%	5.0%	50.9%

第六表は時刻名がはっきりと詠み込まれている歌に限り数量のみ示してみた。それは、全体の半分以下である。これを割合からみると、朝が二〇・二%で最高を占めている。次いで夕方の十八・四%、暁の五・五%、夜の五・〇%と続いていて、昼は全然ない。

『明解古語辞典』によると、暁は、夜の明けるちょっと前「あけぼの」より早い時刻をいう。そこで、夜が明けようとする頃、月が空にでている迄の「有明」も含めた。朝は、夜がほのぼのと明けようとする頃とする。夕は、辺りが薄暗くなってしばらくの月が昇る頃迄を示すのである。

以上のことから、「霧」の詠まれた時間は、早朝と夕暮時であることがわかる。

次に、種類においては、朝霧三十五首、夕霧四十六首で夜霧、暁霧、昼霧という単語はみえない。「霧」の種類の存在は、つまり呼び名それ自体に関心が深かったということを示すものであると考えられる。

勅撰集の和歌は、朝、夕における「霧」に関心がもたれ

て詠まれたといって差支えないであろう。それに、前述の気象学の条件からみてもわかるように、霧の発生は、多く夜の明けやらぬ朝や、陽の暮れ落ちる夕であることから、昼の詠歌数がないとしても当然といわねばならない。

また、修辞上の技巧からもいえよう。

「霧」は、「恋風」のように、ウエットな日本的風土の生んだ素朴な想定で、やがては比喩化されて文学の上に生き続けている「恋霧」にもなっているからである。

『万葉集　巻第七　摂津作

二四〇志長鳥（しながどり）居名野乎来者（ゐなのをくれば）有馬山（ありまやま）夕霧立（ゆうぎりたちぬ）宿者無而（やどりはなくて）

もちろん、ここで夕景と旅路とが、この場面を彩っていることは否まれない。しかし、又霧のもつ情感がこの作者をしていっそうせつない表現にかり立てていることも見逃せないであろう。

霧は、浪漫性をもつという。それは、霧が対象をつかみえない幻の如くに揺曳するからではなかろうか。人間の悲しさは、それ故にこそ、そこに美しいものを感じるのである。あこがれをさえ籠めるのである。そして、その美しいものをまぼろしを追うてゆくのである。人間は、この幻を追うてゆく時がいちばんかなしくも美しいー。わたくしはそう考えている。だからこそ「朝霧のおほに相見し」（注1）その人は、幻の如くに白く尾をひいて過ぎ去っていった、その人のことであり、それを、霧の現実性客観性に即して詠みあげたものであろうが、しかしなお、わたくしは作者が何故に、その人のうしろでを朝霧ということばで表現したか、ということに心惹かれるところがある。』（注2・古典随想「ことばと文学」遠藤嘉基氏「霧の唄」による。）

前述の引用をはじめとして、万葉集の中には、霧を修辞法的に使った比喩歌がみられる。（注3・万葉集五。七九九、六。九八二、十。二二四一、十五。三五八〇、三五八一、三六一五、三六一六）

更に『源語明石の巻に見える光源氏の歌、

嘆きつつ明石の浦に朝霧の立つやと人を思ひやるかな

を十分に解釈するために、如上（注4「万葉修辞の研究」（武蔵野書院）山口正著―万葉集の修辞法より引用した。）万葉の霧を認めておく心要があろう。明石の浦の朝霧も、ともに万葉から源語へ幾世かけて吹く恋風であり（注5・この部分の引用のうち、恋風説は省いている。）古典の世界にながくも立ちわたる恋霧だからである。』（「文学論藻」第十三号市村宏氏「万葉集恋霧考」による。）

これらの恋霧が、二十一代勅撰集に立ちわたらないはずがない。

風雅集　巻第十三　恋歌四

題志らず　　読人志らず

二六九妹を思ひいのねられぬに暁の朝霧ごもりかりぞ鳴くな

る　等がみられる。

以上から考えても、修辞上の技巧としての朝、夕の時間的設定が心要であることがわかる。また、霧のもつ浪漫性が一段と発揮される時間であるといえよう。

二十一代勅撰集における「霧」は、秋の朝、夕に立ちわたるものに関心がもたれたといえよう。

（注1・万葉集、巻第四、　吾兄朝霧之　欝相見之　人故爾命可レ死　恋渡鴨）

四、霧と詠み合せ

霧と他の素材との詠み合せを、霧の詠歌三九七首について、1・天象、2・地象、3・植物、4・動物、5・その他としてまとめてみた。

1　天象とは、空や宇宙における現象をさすものである。

〔第七表〕

名前	数
月	51
風	37
露	26
雲	23
雨	12
雪	4
霞	3
霜	1

第七表によると、月が五十一例の多くを数え、霧との詠み合せが一番多い。これは、霧を詠むというより、月を詠むのに霧の風情が添えられている。この月が出る手だてにしばしば風が詠み込まれている。又、風の多いのは、秋の夕に吹くところが霧の季節、時間と同じことにもよる。露雲、雨も時間的、気象学上の一致による。霞は春のものとして、秋のものである霧との対照の手法が、時代の好むところとなっている。

以上のように、「霧」と天象との詠み合せは、月を詠むのに霧の風情が添えられている他、風、露、雲、雨、雪、霞、霜は、気象学的条件の一致と、その情趣性の類似であるといえよう。

2　地象は、霧の立つ場所を現わしている。

〔第八表〕

名前	数
山	143
川	46
野	37
海	27
里	27
庭	22
田	14

第八表から、霧は山辺に立つものが一番多く、次の川辺に関するものが三分の一程度である。次いで、野辺、海、里に立つ霧、そして庭に立つ霧というふうに、霧の立つ場所を表わしている。

3　植物は、紅葉、萩、女郎花、稲葉と秋の草木が多い又、常磐木である松が、霧の立つ地理的条件の一致と、霧のもつ情趣性と相俟って多く詠まれている。

4　動物についてみてみる。

〔第九表〕

名前	数
雁	48
鹿	34
千鳥	7
鴫	2

詠歌数の多い雁、鹿は、秋の代表的な動物であるといえよう。千鳥は、冬の鳥であるが、その詠み合せは、冬にも発生する川霧であるからおかしくない。これら動物の用例は、その姿ではなく、鳴く状態が詠まれている。霧に隠された姿の鳴き音、羽音は、いっそう哀しいものとなろう。

5　その他については、1　2　3　4に属していないものについてみてみた。

相聞の心の道具立ての一端としてみることができる衣、袖の用例が、それぞれ八例ずつある。それに、多くの舟類が詠まれているのは、霧が川辺や海辺に発生するものであり、その情景をいっそうひき立てるためのものであるといえよう。用例は、十三例ある。

おわりに

二十一代勅撰集、すべての歌集に「霧」を素材に扱った詠歌がある。それは、多く秋の部にあり、霧の気象学上の発生とともに、秋の季節のもつ物寂しい情趣との一致によるものといえよう。時間的には、朝、夕の詠歌が多いのもまた、前述のごときものによる。霧と他の素材との詠み合せも秋の季節のものとが多い。

以上のことから、霧の勅撰集における現われ方は、今、我々の霧に抱く感情がそのままであるといえよう。

いや、我々が、古からの人の情をうけついでいるのであろうか。